

み期間中としたのは学校の授業がなく病棟生活のみであるため、一般状態の観察が充分に行う。
1回検温実施で異常の発見がおくれるのを防ぐためである。

〔考 察〕

障害度あるいは症状にあわせた体温、脈膊の測定により、異常のない患児はわずかながら自由時間が得られ満足がみられた。看護面においても只一律に業務を消化していくのではなく必要性により実施すると云った業務の洗い直しが出来た。

〔おわりに〕

PMD児にとっても検温は異常の発見に重要である。しかし観察を充分に行えば図1でもよいと結論を得た。

★ 強度に脊柱変形を伴った患児の生活援助

国立療養所東埼玉病院

岩 崎 と よ 那須野 美 子
竹 内 洋 子 加 藤 則 子

〔はじめに〕

このPMD児は17才、障害度（2イヤーD8度）の男子である。車椅子上の姿勢では脊柱が強度に右側に曲がり、そして、前方に傾いている状態である。患児の車椅子上生活は一日の¼位である。このような車椅子上の姿勢で生活していくには、苦痛と疲労が重なり、車椅子生活を安全安楽に過ごすことは出来ないのではないかと。現在、大きな問題点は出ていないが、心理、身体面に影響してくるのではないかと、等々のことを考慮し、車椅子上の姿勢を良姿勢に少しでも近づけて、日常生活の看護に当たりたいと思い取り上げて見ました。

〔方 法〕

1. 患児から今の車椅子上の姿勢について、どのような支障があるか観察し、質問式で把握する。
2. 患児の車椅子の改良を試みる。
3. 患児の現在の支障が少しでも解消されたかを知る。

〔問 題 点〕

1. 食事の時、同じ姿勢でいる為苦痛が伴い時々反動を付けて胸部を挙上し、車椅子とテーブルの高さが一致しない。又、機能の残っている指先だけをテーブルに乗せて、食事をするので

右腕が疲れて来る。

2. 内臓器管を圧迫する。
3. 車椅子上の姿勢で最高一時間位までは、心理、身体面に影響しないが、それ以上過ぎると顔に疲労感の表情が見られる。

これらの問題点を配慮した車椅子の改良を試みたが、なかなかうまくいかず、PTと話し合った結果、新しい車椅子を作製することになった。

〔改良点〕

1. 右の肘を置く台を取り付けることにより上体が支えられること。右手をテーブルに乗せてやれば、自分で箸やスプーンを持って食べ物を口に運ぶことが出来るので、車椅子に合ったテーブルを取り付けて、取りはずしが出来るようにする。
2. 後より両手で支えた位置が、一番楽な姿勢であるとの希望があったので、その位置にひもで挙上するようにする。そして、ひもを胸部の圧迫を少なくする為に、胸の部分にスポンジを入れ、ひもの材質はコールテンにする。

〔結果、考察〕

新しい車椅子を使用してみて、患児が右側に偏る傾向があるので右側の横板の高さが低い。車椅子に合ったテーブルを取り付けたことによって、今までのように反動をつけて頭を上げることもせずすみ、ゆっくり、自分で食べられるようになった。

ベルトは身体の当る部分が前のベルトより苦痛が軽減された。悪い点は改良し、そして、排泄においてもトイレ使用が出来なく、ベッド上にてゴム製便器クッションを使用し、尿器と紙オムツによって行っているが、便秘、腹満等症状が現われたり、排泄に時間がかかったりするので、体位交換も考えなければならない。車椅子の生活で長時間は無理のようであり、食事時間の30分位は使用出来ると考え充分観察しながら出来るだけ、この車椅子を使用していきたいと思っている。

写真1



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

〔はじめに〕

このPMD児は17才、障害度(2イヤーD8度)の男子である。車椅子上の姿勢では脊柱が強度に右側に曲がり、そして、前方に傾いている状態である。患児の車椅子生活は一日の1/4位である。このような車椅子上の姿勢で生活していくには、苦痛と疲労が重なり、車椅子生活を安全安楽に過ごすことは出来ないのではないか。現在、大きな問題点は出ていないが、心理、身体面に影響してくるのではないか、等々のことを考慮し、車椅子上の姿勢を良姿勢に少しでも近づけて、日常生活の看護に当たりたいと思い取り上げて見ました。